

杜甫詩の眞偽

―「避地」詩札記―

後藤 秋 正

はじめに

『杜詩詳注』（以下、『詳注』）巻四には五律「避地（地を避く）」⁽¹⁾を収める。

避地歳時晚 地を避けて歳時晚れ

竄身筋骨勞 身を竄^{かぐ}して筋骨^{つか}勞る

詩書遂牆壁 詩書 遂に牆壁

奴僕且旌旆 奴僕 且つ旌旆

行在僅聞信 行在 僅かに信を聞く

此生隨所遭 此の生遭う所に隨う

神堯旧天下 神堯の旧天下

会见出腥臊 会见^{かみち}出腥臊より出ずるを見ん

この詩について『詳注』は顧宸の注（『辟疆園杜詩註解』五言律、卷二）を一部改変して引く。

題下自注云、至徳二載丁酉作。然必元載冬作也。此

公避地白水・鄜州間、竄歸鳳翔時也。

題下の自注に云う、至徳二載丁酉の作と。然るに必ず元載冬の作なり。此れ公 地を白水・鄜州の間に避け、竄^{ひそ}かに鳳翔に帰せんとせし時なり。

『詳注』は顧宸の注に従つて「自注」を否定し、至徳元載（七五六）冬、長安賊中での作と見なしたのである。

『宋本杜工部集』（続古逸叢書）はこの詩を収めず、最も早く見えるのは『草堂詩箋』巻四十、「逸詩拾遺」であろう。顧宸は「此少陵逸詩、見文苑英華（此れ少陵の逸詩、文苑英華に見ゆ）。」と言っているが、『文苑英華』には見えない。『草堂詩箋』は「右一篇、見趙次翁本。題云至徳二載丁酉作（右の一篇は、趙次翁本に見ゆ。題して至徳二載丁酉の作と云う）。」と言う。また林継中「杜詩趙次公先後解輯校」（上海古籍出版社、一九九四）乙帙卷之三の「避地」の「校」には、「古逸叢書本杜工部草堂詩箋逸詩拾

遺題下注云、右一篇見趙次翁本、題云、至徳二載丁酉作。」と、同様の指摘がある。さらに嚴羽『滄浪詩話』「考証」は、「至徳二載丁酉作。」の部分を詩題ではなく、杜甫の自注と見なして、

少陵有「避地」逸詩一首云、「……」。題下公自註云、「至徳二載丁酉作」、此則真少陵語也。今書市集本、並不見有。

少陵に「地を避く」逸詩一首有りて云う、「……」
と。題下の公の自註に云う、「至徳二載丁酉の作」と、これ則ち真に少陵の語なり。今書市の集本、並びに有るを見ず。

と言ふ。⁽²⁾これとほぼ同一の文章は魏慶之『詩人玉屑』卷十一にも、「少陵有避地逸詩一首云、……（少陵に地を避く逸詩一首有りて云う、……と）」として見えている。このようにこれを杜甫の詩であると認めて収録する諸本は『草堂詩箋』以後、相当数存在する。

しかし、この詩を杜甫の真作と見なす見解があるいっぽうで、早くから偽作説もあつた。以下、諸説を検討しながら、この問題について考えてみたい。

一

偽作説を早くに述べたのは金の承安二年（一一九七）の進士、王若虚の『滹南詩話』卷一（『滹南遺老集』卷三八、『歷代詩話統編』）である。

世所伝「十（一作千）注杜詩」、其間有曰新添者四十余篇。吾舅周君德卿嘗弁之云、「唯「瞿塘懷古」・「呀鵲行」・「送劉僕射」・「惜別行」為杜無疑。自余皆非本真、蓋後人依倣而作、欲竊盜以欺世者。或又妄撰其所從得、誣引名士以為助。皆不足信也。」

世に伝う所の『十注杜詩』、其の間に新添と曰う者四十余篇有り。吾が舅の周君德卿は嘗て之を弁じて云う、「唯だ「瞿塘懷古」・「呀鵲行」・「送劉僕射」・「惜別行」のみ杜為ること疑い無し。自余は皆な本真に非ず、蓋し後人 依倣して作り、竊盜して以て世を欺かんと欲する者なり。或いは又其の従いて得し所を妄撰し、名士を誣引して以て助けと為す。皆な信ずるに足らざるなり。」と。

ここに言う『十注杜詩』がどの書物を指すのかは明らかではないが、例えば『集千家注杜詩』（四庫全書本）卷十には「避地」が収録されている。王若虚は根拠は示さない

が、周德卿⁽³⁾の発言を拠り所として杜甫の「本真」の詩ではないと見なしたのである。また清・薛雪（一六八一—一七六三?）、字は生白の『一瓢詩話』（王夫之等撰『清詩話』所収）には、次のようにある。

「避地歳時晩……」。云は杜少陵題「避地」逸詩、下有公自注云、「至德三載丁酉作」。今坊本不載。嚴滄浪云、「真少陵語也。」余謂真不是少陵語、題下所注、更不是少陵語。滄浪之眼易惑乃爾。

「地を避けて歳時晩る……」。云う是れ杜少陵の「避地」と題する逸詩と、下に公の自注有りて云う、「至德三載丁酉の作」と。今坊本は載せず。⁽⁴⁾嚴滄浪云う、「真に少陵の語なり」と。余謂うに真に是れ少陵の語ならず、題下に注する所は、更に是れ少陵の語ならず。滄浪の眼は惑い易きこと乃ち爾^{しか}り。

薛雪は、嚴羽が題下注に幻惑されて杜甫の詩と見誤ったと考えたのである。ここに「至德三載」とあるのは「二載」の誤りである。至德三載は戊戌であり、しかも二月に乾元に改まっている。これらは偽作である根拠を明示しないが、この詩を詳細に検討し、偽作であると断定したのは呉企明「杜甫詩弁偽札記」（『唐音質疑録』上海古籍出版社、一九八五所載。以下、「弁偽札記」）である。「弁偽札記」

は『溥南詩話』、『一瓢詩話』などの説を検証し、至德二載の「歳時晩」る時節には杜甫が「地を避く」という行動をとることは不可能であること、この時には肅宗も玄宗も長安に復帰しているので行在所は存在しないことなどを根拠として至德二載に書かれたという説を否定し、さらに至德元載説についても、この年の冬に杜甫は長安に軟禁されていたので、これも「地を避く」という行動をとることは不可能であることから否定し、次のように別の唐代詩人が至德元載の冬に賊を避けた時の作であり、趙次公が誤って集中に収めたものであると結論づけている。

「避地」当是另一位詩人在至德元載冬写的避賊詩、被趙次翁誤收入杜甫集中。為免以假亂真、特作此弁証。なお「弁偽札記」については修培基編撰『全唐詩重出誤収考』（陝西人民出版社、一九九六）の杜甫「避地」の条が、以下のように言及している。

『錢注杜詩』一八附于卷末、……南宋蔡氏收入四〇、潘氏本不載、郭氏收入補三。呉企明拠杜甫至德二載之行実。断定這首詩決非出自杜甫之手、并引王若虛『溥南詩話』・胡才甫『滄浪詩話箋注』語、加以弁証、見『唐音質疑録』。

「南宋蔡氏」は『杜工部草堂詩箋』、「潘氏本」は潘氏澆

喜齋藏「分門集注杜工部詩」、「郭氏」は郭知達『九家集注杜工部詩』をそれぞれ指している。

蔣寅「避地」弁偽（『草堂（杜甫研究學刊）』、一九八六年第一期）も「自注」と詩の内容、『溇南詩話』、『一瓢詩話』、『詳注』などの説を詳細に検討して偽作と認めており、参考になる点が多い。結論部分を引用しておく。

……實際上這首「避地」詩写出的「皇皇奔赴之情」（仇氏語）、應是一個奔竄流離的人的声口、即使說「避地」是杜甫的諱言、詩的內容与杜甫的經歷也還是不合的。所以、我認為此詩是其他人的作品詛入杜甫集中。或是宋人偽托寄于杜甫名下。……我是同意薛雪的意見的、詩的語言略嫌粗淺直露、不似杜風。

このほか、李慶甲集評校点『瀛奎律髓彙評』（上海古籍出版社、一九八六）卷三十二は馮班（一六〇二〜一六七一）の、「末句亦非体、疑非杜真作（末句は亦体に非ず、疑うらくは杜の真作に非ず）」という評語を載せる。また同じく『瀛奎律髓彙評』に引く紀昀（一七二四〜一八〇五）の説は、「此首不載本集、逸詩取之、或曰非少陵作。然氣味甚似（此の首は本集に載せず、逸詩に之を収む、或いは曰う少陵の作に非ずと。然るに氣味は甚だ似たり）」というものであって、疑問を呈しつつも、情趣は杜甫の詩

に似ることを認めている。

二

杜甫の真作と見なす場合でも、制作時期をどの時点に想定するかによっていくつかの説に分かれる。

まずは自注とされる「至徳二載」の記述に基づいてこの年の作とする説がある。「杜臆」巻五は、『滄浪詩話』を引いたのちに以下のように言う。

按年譜、是年春公在賊中、至夏脱身走鳳翔。詩作於此時。玄宗在蜀、故云、「行在僅聞信。」天子且然、則此生亦任其所遭而已。結語在他人必用作起、今作結有不尽之悲。

年譜を按ずるに、是の年の春 公は賊中に在り、夏に至り身を脱して鳳翔に走ぐ。詩は此の時に作る。玄宗は蜀に在り、故に云う、「行在 僅かに信を聞く」と。天子すら且つ然らば、則ち此の生も亦其の遭う所に任すのみ。結語は他人に在りては必ず用て起と作すに、今 結と作すは不尽の悲しみ有ればなり。

『杜臆』は、至徳二載の夏、杜甫が長安の金光門から脱出して鳳翔へ向かった時の作と見なし、第五句の「行在」を、太上皇（玄宗）の成都の行在所を指すと考えたのであ

る。肅宗の行在所は始めは靈武に置かれたが順化に、次いで彭原へと移り、鳳翔に移つたのは至徳二載（七五七）の二月のことである。

黄生『杜工部詩說』卷十二も至徳二載の作と認めている。

此篇見趙次翁本、題云、至徳二載丁酉作。拠所題年分与詩意參考之、似在鄜州時作。公以八月還鄜州、至十月広平王収復東京、十二月上皇至自蜀。「行在」字、「神堯」字、皆謂上皇也。『千家注』編此於梓・閬諸詩之間、則以為指代宗幸陝之事。然詳結句「神堯旧天下、会见出腥臊」、則非安史之乱不足以当之、其誤審矣。

此の篇は趙次翁本に見ゆ、題して云う、至徳二載丁酉の作と。題する所の年分と詩意とに拠りて之を參考するに、鄜州に在りし時の作に似たり。公は八月を以て鄜州に還り、十月に至りて広平王 東京を収復し、十二月に上皇 蜀より至る。「行在」の字、「神堯」の字は、皆な上皇を謂うなり。『千家注』は此れを梓・閬の諸詩の間に編めば、則ち以て代宗 陝に幸するの事を指すと為す。然るに結句の「神堯の旧天下、会见腥臊より出ざるを見ん」を詳かにすれば、則ち安史の乱に非ざれば以て之に當つるに足らず、其の誤れること審かなり。

広平王は肅宗の長子、李俶のこと、後の代宗である。ここに言及される『千家注』が、先述したように『集千家注杜詩』であるならば、その巻十は、「避地」を「愁坐」と「閬山歌」の間に置き、「閬山歌」の注に、「広徳二年、閬州作。鶴曰、是年公自梓黎家再往閬、冬又自閬帰成都（広徳二年、閬州の作。鶴曰く、是の年 公は梓より家を挈^{たづなき}えて再び閬に往き、冬 又閬より成都に帰る。）」と言っている。後に述べるが、代宗の広徳二年（七六四）に近い時期の作とする見解もあつたのである。黄生はこの詩を、『杜臆』と同じく至徳二載の作としつつ、杜甫が家族を鄜州に訪ねた時の作と見なしている。確かに杜甫が鳳翔の行在所から鄜州・羌村の家族のもとに向かつたのは至徳二載の閘八月、洛陽が李俶や郭子儀らの軍によって回復されたのは同十月のことであり、この時杜甫は鄜州から呼び戻されて左拾遺として復歸し、ついで肅宗に付き従つて長安に入っている。杜甫は鳳翔の行在所から鄜州へと向かつたのであるから、「行在 僅かに信を聞く」というのは当然、肅宗のそれではなく、上皇（玄宗）の成都の行在所を指すことになる。しかし、たとえ杜甫が上皇に親近感を抱いていたとしても、ここで上皇の行在所を持ち出すのは飛躍が過ぎよう。また『杜詩闡』巻四はこの詩を「哀王孫」と「悲陳

陶」の間に置いてあるから、長安軟禁中の作と考えたのである。

これに対して『読杜心解』のように至徳元載（天宝一五載。七月、至徳と改元）の作とするものもある。『読杜心解』「少陵編年詩目譜」はこの詩を「悲青坂」と「送靈州李判官」の間に置き、卷三之一の注においては、「編至徳元載、即天宝十五載、時安祿山已陷長安矣（至徳元載、即ち天宝十五載に編む、時に安祿山 已に長安を陥る。）」と言い、「神堯」を高祖・李淵のことと解し、「苦奔竄而望治也（奔竄に苦しみて治を望むなり。）」と述べている。また『杜詩鏡銓』卷三は、「三川觀水漲二十韻」と「哀王孫」の間に置き、「行在」の句には、「時肅宗已即位（時に肅宗は已に即位す。）」と注し、「奴僕」の句には、「当時賊党如田乾真・蔡希徳・崔乾祐之徒、各擁旌旄（当時 賊党の田乾真・蔡希徳・崔乾祐の徒の如きは、各、旌旄を擁す。）」と注を加え、さらに尾聯には、「腥臊、犬羊也、指祿山（腥臊は、犬羊なり、祿山を指す。）」と言っているから、『杜詩鏡銓』もこの詩を至徳元載の秋ころ、長安軟禁中に書かれたと考えたのであろう。

『詳注』の題下注は冒頭に引いた。『詳注』はこの詩を、いずれも至徳元載十月の作である「悲青坂」と「对雪」の

間に置き、顧宸の見解を肯定して、「避地白水・鄜州間、竄歸鳳翔時也（地を白水・鄜州の間に避け、竄れて鳳翔に帰せんとせし時なり。）」と述べていた。また、詩の内容については、「上四避乱傷時、下思遭逢新主而光復旧物也。能写出皇皇奔赴之情、汲汲匡時之志（上四は乱を避け時を傷み、下は新主に遭逢して旧物を光復せんことを思うなり。能く皇皇として奔赴するの情、汲汲として時を匡さんとするの志を写し出だす。）」と述べている。杜甫がどこで捕らえられたのかについて定説はないが、鄜州の近郊で至徳元載の七月下旬から八月上旬のある時期に捕らえられて長安に連行されたと考えられる（『杜甫全詩訳注（四）』講談社学術文庫、二〇一六所載、古川末喜作成「杜甫年譜」による）。従って『詳注』の編次には混乱があろう。「白水・鄜州の間」に避難した時の作と考えるならばこの詩は、五月から七月の間の作となるはずであり、「至徳元載、十月」に、長安で書かれたとするならば、「地を避く」という詩題、もしくは冒頭の句との整合性が失われることになる。「避地」の語自体については後に検討しよう。

近年では張忠綱主編『杜甫大辞典』（山東教育出版社、二〇〇九）が偽作説と「旧注」の至徳二載に書かれたという説を否定して、至徳元載（七五六）の秋に鄜州附近で書

かれたという見解を示しているが、この見解も冒頭の「歳時晩る」という記述と矛盾しよう。

三

ここで詩中に見える「避地」、及び「行在」の語の意味するところについて確認しておこう。

「避地」について『詳注』は張協「七命、八首」(其一)〔『文選』卷三五〕の一文「今公子違世陸沈、避地独竄、有生之欲滅、資父之義廢(今 公子は世を違けて陸沈し、地を避けて独り竄れ、有生の欲滅び、資父の義廢る)。」を出典として引く。殉華大夫が大荒山に隱遁している沖漠公子に向かつて述べた言葉である。この部分を小尾郊一『文選(文章篇)五』(集英社、一九七五)は、「今、あなたは時に背いて隱遁し、この地に身を避けて独り隠れ、生きてゐることの楽しみも消え、君臣の義も廢れ、……。」と訳している。ただし、この一文は『論語』憲問篇の、「子曰、賢者辟世。其次辟地。其次辟色。其次辟言。(子曰く、賢者は世を辟く。其の次は地を辟く。其の次は色を辟く。其の次は言を辟くと)。」を踏まえたものである。賢者は道に行われない乱世においては災難を避けて他の地方に移る、との意味である。吉田賢抗『論語』(明治書院、一九六

〇)はこの前半部分を、「賢者が仕えずに避け遠ざかる場合が四つある。第一に世が乱れると、避けて世に出ない。その次の場合は乱国を去って治まった国に行く。」と通釈し、平岡武夫『論語』(集英社、一九八〇)の「語釈」は「避地」を、「乱れた国を離れて、平和な国に行く。」と解している。『後漢書』卷二十九、邳憚伝には、「後坐事左軫芒長、復免歸、避地教授、著書八篇(後 事に坐して芒の長に左軫せられ、復た免れて歸り、地を避けて教授し、書八篇を著す)。」という一文があり、李賢の注に、「避地、謂隱遁也(地を避くは、隱遁するを謂うなり)。」とある。この場合は俗世間から離れて隱遁する意味になる。

江総「脩心賦」(『陳書』卷二七、江総伝)の序には、「太清四年秋七月、避地於会稽童華寺(太清四年秋七月、地を会稽の童華寺に避く)。」とあり、本文にも、「幸避地而高棲、憑調御之遺旨(幸いに地を避けて高棲し、調御の遺旨に憑る)。」とある。梁・簡文帝の太清四年(五五〇。大宝元年の誤り)の秋、侯景の乱を会稽に避けたのである。詩に目を転じてみよう。王維の「桃源行」(『全唐詩』卷一二五)は桃花源の故事に題材をとった作品である。

初因避地去人間 初め地を避くるに因りて人間を去り
及至成仙遂不還 仙と成るに至るに及んで遂に還らず

この「避地」は秦末の動乱を避けて桃花源に移り住んだことを言う。

儲光義の「貽王处士子文」(『全唐詩』卷一三八)は王勃に贈ったものである。

避地歌三楽 地を避けて三楽を歌い

遊山賦九吟 山に遊んで九吟を賦す

「三楽」は、天・地・鬼を祀る音楽。「九吟」は、九歌と同じく、禹の時のものと伝えられる楽曲に借りて言うのであろう。この「避地」は隠遁というのに等しい。

王昌齡「武陵開元觀黃鍊師院、三首」(其二)(『全唐詩』卷一四三)は武陵の道觀、開元觀を桃花源に喩えている。

聞道秦時避地人 聞道きくみちく秦時 地を避くるの人
至今不与人通問 今に至るも人と通問せず

この「避地」はまさしく戦乱の地を離れて平穩な場所に移り住むという意味である。

劉長卿「宿嚴維宅、送包佶」(『全唐詩』卷一四九)の「避地」も、隠遁する、隠居するという意味で用いられる。

江湖同避地 江湖 同とよに地を避け

分首自依依 分首して自ずから依依たり

また劉長卿には「避地江東、留別淮南使院諸公(地を江

東に避けんとして、淮南使院の諸公に留別す)」(『全唐詩』卷一五一)と題する詩もある。こちらは建中三年(七八二)の春、以前随っていた李希烈⁷の反状が明らかになったために、その陣營から去って江東へ行こうとした時の作である。

李白は詩中にはこの語を用いないが、「経乱後、將避地剡中、留贈崔宣城(乱を経て後、將に地を剡中に避けんとして、崔宣城に留贈す)」(『全唐詩』卷一七二)、及び「避地司空原、言懷(地を司空原に避け、懷いを言う)」(『全唐詩』卷一八三)という題をもつ詩がある。前者は至徳元載の春、宣城で書かれており、詩中に安祿山が長安を陥落させたことを、「中原走豺虎、烈火焚宗廟(中原 豺虎を走らせ、烈火 宗廟を焚く)」と描写する。後者は至徳二載の冬、司空原(司空山)で書かれた。末聯には隠遁の意志を示して、「一随王喬去、長年玉天賓(一たび王喬に随つて去り、長年 玉天の賓たらん)」と言う。いずれも戦乱の地を去って平穩な地に移るという意味で用いられる。

杜甫の詩にはこの語が三例見られる。早いのは七律「発閩中」(『詳注』卷一二)であり、広徳元年(七六三)の冬、閩州から梓州へ向かう時に書かれた。

前有毒蛇後猛虎 前に毒蛇有り後には猛虎

溪行尽日無村塢 溪行 尽日 村塢無し

……

別家三月一書來 家に別れてより三月 一書來る

避地何時免愁苦 地を避け何れの時か愁苦を免る

第五句に「女病妻憂婦意急（女病み妻憂うれば婦意急なり）」とあるのは、妻からの手紙で娘の病氣を知ったのである。多くの注はこの詩の「避地」に触れないが、例えば

李寿松・李翼雲『全杜詩新釈』（中国書店、二〇〇二）は、「為避乱而輾転外郷。」と簡潔に注する。徐知道の乱によって浣花草堂に戻れなくなった杜甫は「地を避け」て、家族を梓州に置き、周辺の土地を転々としていたのである。大暦四年（七六九）の春、潭州からさらに南方の衡州へと湘江を溯ろうとしていた時に書かれた五律「南征」（『詳注』卷二二）にもこの語がある。前半を引こう。

春岸桃花水 春岸 桃花の水

雲帆楓樹林 雲帆 楓樹の林

偷生長避地 生を偷みて長く地を避け

適遠更霑襟 遠きに適かんとして更に襟を霑す

『詳注』と『杜詩鏡詮』卷三之六が楊慎の説を引き、「桃水、用秦人桃源事。……避地、接桃花句（桃水は、秦人の

桃源の事を用う。……地を避くは、桃花の句に接す。）」と

述べるように、この詩の「避地」は桃花源の故事を踏まえ、平穩に暮らせる土地を長いこと探し求めていることを言う。最晩年の大暦五年（七七〇）に書かれた七律「長沙、送李十一」（『詳注』卷二三）の冒頭には次のように言う。

与子避地西康州 子と地を西康州に避け

洞庭相逢十二秋 洞庭 相い逢う十二秋

李十一は李衡のこと。『詳注』に、「公以乾元二年冬寓同谷、至大暦五年為十二秋（公は乾元二年の冬同谷に寓するを以て、大暦五年に至るを十二秋と為す。）」とあるように、李衡とは乾元二年（七五九）の冬に西康州（同谷）で会ったことがある。杜甫にとっては秦州から同谷へと移ったことも「地を避」ける行動だったのである。

杜甫の詩における「避地」は、杜甫以前の詩と同様、「南征」の詩で明らかのように、桃源郷のような、戦乱のない平穩な場所に行くことを意味することは明らかである。では「行在」、「行在所」の語はどうであろうか。

「送韋十六評事充同谷防禦判官」（『詳注』卷五）は至徳二載の夏、鳳翔の行在所で、長安軟禁中に知った韋評事が同谷へ赴任するのを見送った詩である。冒頭を引く。

昔没賊中時 昔 賊中に没せし時

潜与子同遊 潜かに子と同一遊ぶ

今帰行在所 今 行在所に帰す

王事有去留 王事 去留有り

この行在所は当然、鳳翔を指す。「北征」(『詳注』巻五)は、前詩と同じ至徳二載の閏八月、鳳翔の行在所から妻子のいる邠州へ帰った時の作である。

揮涕恣行在 涕を揮って行在を恣い

道途猶恍惚 道途 猶お恍惚たり

この句は、旅立ってきた鳳翔の行在所に在る「中興の主」である肅宗を思慕することを言う。この詩からも『杜臆』が「行在」を成都に逃れた玄宗の行在所を指すとする説の不自然さが理解されよう。「送李卿燁」(『詳注』巻一二)は、一度は刑部侍郎に昇ったものの乾元元年(七五八)の四月に、嶺南の県尉に左遷されていた李燁が広徳二年(七六四)の正月、赦されて長安へ戻る途中、閩州に立ち寄った際に書かれた送別の詩である。前半を引く。

王子思婦日 王子 婦るを思うの日

長安已乱兵 長安 已に乱兵あり

霑衣問行在 衣を霑して行在を問い

走馬向承明 馬を走らせて承明に向かう

この詩が書かれた前年の十月には、高暉に導かれた吐蕃が京畿に侵攻し、代宗は一時期、陝州へと逃れていた。こ

の行在は代宗の行在所をいう。代宗は十二月には長安へ復帰するのだが、杜甫は行在の状況を十分には知り得ていなかったためにこのように詠じたのである。後にも述べるが、『集千家注杜詩』が「避地」を閩州での作と見なしたのは、この詩の存在があったからではなからうか。「傷春、五首」(其三三)(『詳注』巻一三)も前詩と同じ閩州で広徳二年の春に書かれた。末尾を引こう。

行在諸軍闕 行在 諸軍闕け

來朝大將稀 來朝 大將稀なり

賢多隱屠釣 賢は多く屠釣に隠る

王肯載同婦 王肯て載せて同に帰らんや

この行在も陝州の行在所を指して言う。朱鶴齡『杜工部詩集輯注』巻十は『唐書』を節略して引き、「代宗幸陝、諸鎮畏程元振讒構、莫至朝廷、所恃者惟郭子儀一人(代宗陝に幸するや、諸鎮 程元振の讒構を畏れ、朝廷に至るもの莫し、恃む所の者は惟だ郭子儀一人のみ)。」と言っている。ただし「送李卿燁」を書いた時と同じく、詳しい情報を得られなかったので、「其四」では、「近伝王在洛、復道使婦秦(近ごろ伝う王は洛に在りと、復た道う使は秦に帰ると)」と述べていて、陝州という場所を把握していたわけではない。杜甫の詩に最後にこの語が見えるのは大曆

二年（七六七）の七月、夔州で書かれた「贈李八秘書別、三十韻」（『詳注』巻一七）である。長安に向かう李某とはかつて朝廷で同僚だった。冒頭に次のように言う。

往時中補右 往時 中の補右

扈蹕上元初 扈蹕す上の元初

反気凌行在 反気 行在を凌ぎ

妖星下直廬 妖星 直廬に下る

『詳注』は、「反気四句、上皇西巡（反気の四句は、上皇西巡す。）」と言い、長安を脱出して蜀地に向かった玄宗（上皇）の行在所を反乱の気配が覆っていたことをいうと解している。この句の存在が『杜臆』の解釈に影響したのではないだろうか。ただし『読杜心解』巻五之三は、「其時鳳翔寇警晝報（其の時 鳳翔の寇警は晝ねて報ず。）」と書いており、鳳翔の行在所を指すとする説(8)もある。

四

「避地」に戻ろう。この詩の冒頭の句について顧宸の注が、「曰歳時晩、必是冬月矣（歳時晩ると曰えば、必ず是れ冬月なり）」と指摘するように、冬、それも年末に書かれたことは確かである。したがって『杜臆』のように、至徳二載の夏に、長安から脱出して鳳翔へ向かった時の作と

する説には根拠がない。

長安軟禁時の作とする『読杜心解』、『杜詩鏡銓』、『杜詩闡』などの説はどうであろうか。杜甫が反乱軍占領下の長安に留まっていたのは、ほぼ至徳元載（七五六）の秋から翌二載の春の末までである。その間の冬と言えば至徳元載の冬しかない。この時期に、果たして反乱軍の支配する地域から逃れて平穏な地に向かうことを詠ずるのであろうか。

先述したように『詳注』はこの詩を、「悲青坂」の後に置く。この詩は至徳元載十月に、唐軍が陳陶斜での敗戦に続き青坂で再び大敗したことを詠ずる。「避地」を編次して長安軟禁中の詩のうちに配置するならばこの時点しか考えられないが、余儀なく長安に留められている境遇を「地を避けて歳時晩」と詠ずることは、占領下の長安を桃源のような平穏な地と見なすことに他ならない。したがって、長安で書かれたとする説は全て否定されよう。

それでは『集千家注杜詩』のように閬州で書かれた可能性はないのだろうか。⁽⁹⁾杜甫が梓州・閬州一带を往来していたのは、嚴武を綿州まで送った宝応元年（七六二）四月、上元を改元）の七月から広徳二年（七六四）の二月までであり、この間の冬といえば広徳元年（七六三）七月、宝応を改元）だけである。しかも先述の通り、この年の十月に

は吐蕃が長安に入寇して代宗が陝州に避難し、十二月になつて郭子儀が吐蕃を撃退して代宗が戻るといふ事態が起つている。この間は「行在」が置かれたこともあつて、この説は十分に成立しそうではある。しかし、杜甫はこの吐蕃の入寇が原因で「地を避」けていたわけではない。徐知道の叛乱が起つて浣花草堂に戻れなかつたのである。杜甫はこのことを「贈王二十四侍御契四十韻」(「詳注」巻一三)で「子去何瀟灑、余藏異隱淪(子 去るは何ぞ瀟灑たる、余れ藏るるは隱淪に異なれり)」と、振り返っている。

おわりに

辺連宝(一七〇〇)一七七三)の『杜律啓蒙』五言巻一はこの詩について、「首聯已完題面、以下俱是感慨(首聯は已に題面に完し、以下は俱に是れ感慨。)」と述べ、ついで次のように指摘する。

只五六句中、便作九転回腸、是何等神理。且豫卜賊勢不久、則兩京恢復國運中興、已在公握算中矣。是何等識見。其以稷契自比、有以也。

只だ五六句の中、便ち九転回腸を作す、是れ何等の神理ぞ。且つ豫め賊勢の久しからざるを卜せば、則ち兩京恢復して國運中興すること、已に公の握算中に在

り。是れ何等の識見ぞ。其の稷契を以て自ら比するは、
以有るなり。

このように杜甫の先見性を無条件に賛美する見解は別としても、真偽の問題は決着をみたとは言えない。先に「弁偽札記」の説を見たが、近年に至つても王士菁『杜甫詞典』(河南大学出版社、二〇一一)は、白水・鄭州から鳳翔へと向かう時の作と認めている。この説が成り立たないことについてはすでに述べた。

『杜甫全集校注』(人民文学出版社、二〇一四)は「備考」としてこの詩に「關於此詩真偽的考弁」を付し、諸家の見解を引用しながら、「今按、是詩真偽、諸家異説、似無確拠、今仍依顧說繫之至德元載冬。」と述べている。さらに謝思煒『杜甫集校注』(上海古籍出版社、二〇一五)巻十八、補遺は、「錢箋、『草堂』引趙次翁本題云至德二載(七七五)作。仇注引顧注、当是至德元載(七七五)冬作、蓋避地白水・鄭州間、竄歸鳳翔時也。」と指摘して、顧宸の注を引く『詳注』の説を肯定している。

このようにごく近年に至つても「避地」の真偽については様々な見解が提出されている。その中にある『杜甫全集校注』が「是詩真偽、諸家異説、似無確拠、……。」と言うのは穏当な説ではあるが、すでに述べたように、杜

甫の生涯の行動に照らしてみると、「避地」詩に詠じられるような、ある年の末、それも行在所が置かれるような動乱の時期に、家族が平穩に暮らせる土地を求めて移動する状況はどこにも存在しなかったのである。その点では「弁偽札記」や蔣寅「避地」弁偽、特に後者が、杜甫に偽托した宋人の作であろうと推定したことは妥当である。

王洙（九九七〜一〇五七）が編んだ『杜工部集』二十卷の、王琪の手になる「後記」（『錢注杜詩』附録、『詳注』附編）は次のように述べていた。

近世学者、争言杜詩。愛之深者、至剽掠句語。……又人人購其亡逸、多或百余篇、少数十句。藏弃矜大、復自以為有得。

近世の学者は、争つて杜詩を言う。之を愛すること深き者は、句語を剽掠するに至る。……。又人人は其の亡逸せしを購い、多きは或いは百余篇、少なきも数十句。藏弃して大を矜り、復た自ら以て得たる有りとなす。

杜甫の詩文集が編まれ始めた北宋期に、既に真偽の定かではない作品が混入していた可能性が高いことは容易に想像できるであろう。

注

- (1) 『滄浪詩話』は遂を遂に作り、『詩人玉屑』は僅を近に作る。
- (2) 同様の指摘は、魏慶之『詩人玉屑』卷二、「考証」にも、「少陵有避地詩一首云、「……。」題下公自注云、「至德二載丁酉作」、此則真少陵語也。今書市諸本、並不見有。」と見える。
- (3) 周德卿は周昂のこと。『金史』卷二二六、文苑伝下に伝がある。王若虚は甥にあたる。
- (4) 「坊本」がどれを指すか不明だが、『杜甫全集校注』が指摘しているように、『分門集註杜工部詩』などはこの詩を収録しない。
- (5) 「瀛奎律髓」卷三十二、忠憤類には、杜甫の詩、「春望」、「有歎」、「遣興」、「遣憂」、「恨別」、「秋興」、「積悶」を収め、詩題を「避賢」とする。
- (6) 『詳注』にも同様の注がある。
- (7) 『全唐詩』卷二四九には皇甫冉の「宿嚴維宅送包七」として収録する。佟培基編撰『全唐詩重出誤取考』（陝西人民教育出版社、一九九六）に考証がある。
- (8) 『杜詩鏡銓』卷一六にも、「其時、鳳翔寇警迭報（其の時、鳳翔の寇警は迭いに報ず）」とある。
- (9) 明・邵博『杜少陵先生詩分類集註』卷一八も蜀地にいた時の作と見なすが、「行在指玄宗在蜀也（行在は玄宗の蜀に在るを指すなり）」ともあって、矛盾している。

（北海道教育大学）